

女性に多い甲状腺機能障害

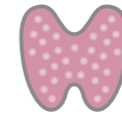
バセドウ病と橋本病

子どもと高齢者のバセドウ病に注意

バセドウ病の15歳以下の発症率は3%ほど決して多くはありません。しかし、学童期にバセドウ病を発症すると、眼球突出、動悸などの身体的症状よりも、精神的な症状として現れることが多くみられます。落ち着きがなく学習障害と指摘されていても、治療を始めると不思議なくらいに落ち着きを取り戻すことがあります。

高齢者のバセドウ病は、症状が表面に出づらく発見がむずかしくなります。通常のバセドウ病は心身ともに活動的になりますが、高齢者の場合は逆に活動量が減って、老化や認知症だと誤解されてしまうケースもあります。

日本では10人に1人が甲状腺に何らかの異常を抱えているといわれており、その9割が女性です。甲状腺は首にある器官で、体の新陳代謝を活性にするホルモンを分泌していますが、異常が起ると漠然とした不調が心身に現れます。しかも、ほかの病気と間違えられたり、更年期や加齢と思われる見逃されたりすることも少なくありません。そこで甲状腺疾患の代表であるバセドウ病と橋本病についてまとめました。



新陳代謝を活性にする
甲状腺ホルモン

甲状腺は、のど仏の下にあり、蝶が羽を広げたような形をしている内分泌器官です。甲状腺ホルモンを分泌し、新陳代謝を活性にして心身の活動を高める働きをしています。人間にとって「元気の源」といえる甲状腺ホルモンは、細胞や組織の発育に作用するため、子どもの成長にも大きな影響を及ぼします。

通常、甲状腺ホルモンは、脳下垂体

腺腫があります。甲状腺は体表にありますが、とても薄く柔らかなため、通常は手で触れても、その輪郭はわかりません。ところが、少しでも腫れると、手で触れるようになり、ある程度大きくなると首を見ただけで腫れがわかるようになります。

一方、甲状腺の機能異常には、甲状腺ホルモンの分泌が過剰になる**甲状腺機能亢進症**と、甲状腺の機能が低下して甲状腺ホルモンが不足する**甲状腺機能低下症**があります。前者の代表がバセドウ病、後者の代表が橋本病です。

から分泌される甲状腺刺激ホルモンによって、血液中の濃度を一定に保たれています。そのバランスが崩れてしまふことがあります。甲状腺の病気でよく知られている**バセドウ病**や**橋本病**は、甲状腺ホルモン分泌のバランスが崩れたため起こります。



甲状腺の形と機能に
変化が起こる

甲状腺疾患には「形」の変化と「機能」の変化という2つの異常があります。病気によって両方に変化が起こる

いずれも正常な細胞を異物とみなし、自分で攻撃してしまう自己免疫の異常が発症に関与しています。



甲状腺ホルモンが
過剰になるバセドウ病

バセドウ病は男女比が1対4で、20、30歳代の女性に最も多く、次が40、50歳代です。甲状腺ホルモンの過剰な分泌で新陳代謝が活発になり過ぎるため、普通にしていても激しい運動をしたかのようにエネルギーを消耗します。

そして**動悸**や**頻脈**で、極端に暑がりになる、心臓がドキドキする、手が震える、気持ちがいらいらするなどの症状が現れます。

外見上では、首の腫れと**バセドウ病眼症**と呼ばれる目の異常が特徴です。

首が腫れると、びまん性甲状腺腫大の状態になりますが、腫れの大きさと症状の強さは比例しません。また、バセドウ病は「眼球が飛び出る」と思っている人が多いようですが、**眼球突出**や**眼瞼後退**など目が見開いたようになる**眼瞼後退**などのバセドウ病眼症は必ず起こるわけでは

監修

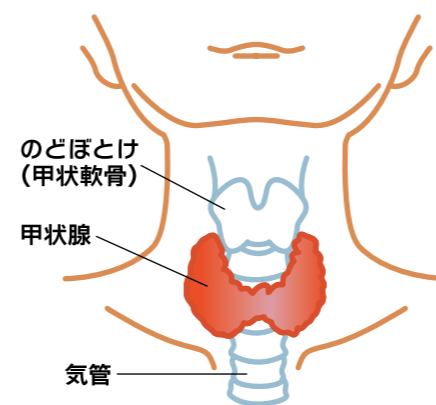


伊藤病院 院長
伊藤 公一 先生
(いとう こういち)

●略歴

北里大学医学部卒業後、東京女子医科大学内分科学教室、米国シカゴ大学内分科学教室助手、同教室非常勤講師を経て、1998年より現職。2002年、筑波大学大学院外科学教室非常勤講師、2005年日本医科大学外科学教室客員教授、2008年、了徳寺大学健康科学部客員教授。日本内分科学会理事、日本甲状腺外科学会理事、日本臨床外科学会広報委員会委員、厚生労働省診断群分類調査研究班班長、日本内分科学会評議員などを歴任。

■甲状腺とは



場合と、どちらか一方だけに変化が起こる場合があります。形の異常には、甲状腺全体が大きく腫れる**びまん性甲状腺腫大**、しこりができる**結節性甲状腺腫大**、

はなく、全体の2割ほどにみられます。バセドウ病の治療には、左記の3種類があり、症状の程度や妊娠の有無などを考慮して選択します。

●**薬の内服** 最も一般的な治療法で、甲状腺ホルモンの過剰分泌を抑える抗甲状腺薬を服用します。症状が治まるまでに時間がかかり、副作用が出る場合があります。初期の診療が大切です。副作用は、服用を始めて3か月ほどが出現しやすい時期なので、気になる症状があったら、すぐに主治医に相談しましょう。副作用の多くは、かゆみや皮疹ですが、尿の色が濃くなる、吐き気がする、肝機能に異常が出るなどの場合もあります。そこで十分な効果がない場合や副作用が強い場合は、次の2つの治療法を検討します。

●**アイントープ治療** 放射線ヨウ素カプセルを飲み、働き過ぎている甲状腺の細胞を破壊します。効果が高く、薬の内服よりも治療期間は短めですが、治療可能な医療機関は限られています。10歳代や妊娠中、授乳中あるいは半年以内に妊娠予定の人には行いません。